

## 第3報 間取りからみた親・子世帯空間

桜の聖母短大 ○佐藤美枝子 日本女子大家政 沖田富美子

目的 これまで一地方都市において、親・子世帯で同居をしている家族の生活の実状とその評価からいわゆる二世帯住宅志向への動きがあること(第1報)、また各世帯の生活行為の場の現状、満足度、今後の希望、必要性等に対する意識及び評価から生活行為の場に対する意識や評価は親・子世帯で異なるが、いずれも同居に対する考え方、現在の同居に対する満足度によって影響をうけている。さらに、満足度、今後の希望、必要性等については、親・子世帯間に意識の違いがみられること(第2報)を報告してきた。本報では二世帯の生活意識への影響を、住居の構造上 間取りから違いを探ることとする。

方法 福島市及び福島市郊外の親・子世帯が一つの住宅に居住している家庭の主婦を対象とした第1,2報(日本家政学会大会要旨集1993,1994)と同じ調査対象に、各住宅の平面図記入を含んだ調査を再度依頼した。その結果62件の家庭の協力を得ることができた。

結果 ①調査対象の親子世帯の世帯構成は、大きく6グループに分けられる。②親子世帯が一緒に居住している住宅は現在2階建が圧倒的に多い(90.1%)。③2階建住宅の平均床面積は325.2㎡で、親世帯空間は49.9㎡、子世帯空間は87.0㎡共用空間は189.1㎡となる。なお共用空間を除いた場合の両世帯の空間の割合は1:2になり子世帯空間が住空間を占める割合が多い。④2階建住宅における親・子世帯のそれぞれの住空間の配置の仕方は、7タイプに分けられる。1階に配置される空間のみに注目した場合、さらに4タイプに大きくまとめる事ができる。⑤調査対象住宅では、親世帯と共用空間を1階に配置するタイプが最も多いが(55件中35件)、中でも2階は子世帯空間のみを配置するタイプが最も多い(35件中31件)。